Vol.58
No. 02

Text ▶ 稲葉俊郎

Title ▶ **原点からの呼びかけ**

画＝稲葉哲郎

2017年3月11日に、NHKのEテレで『SWITCHインタビュー 達人達』という対談番組に出させていただきました。対談相手は音楽家の大友良英さん。ギタリスト、ターンテーブル奏者、作曲家、実験的なノイズ音楽からジャズやポップス、NHK連続ドラマ『あまちゃん』の音楽、一般参加型のプロジェクトまで、あらゆる活動をされています。音楽をジャンル分けや固定観念にとらわれず、広く自由な発想で捉えて活動されているのです。自分も医療の分野で同じことを考えているので、親近感を覚えつつ、その前衛的な活動に敬意を持っていました。

子ども時代を含め、お互いの原点の話を長い時間をかけて話しました。放映日が3月11日であったこともあり、3.11の話にもなりました。2011年当時、自分は現地に何度も手伝いに行き、医療の本質を何度も問い直され続けました。震災から2カ月後の時期に、作家の田口ランディさんの呼びかけで、「みんなはいま、なにを思っているんだろう？」という文章を書くお誘いのメールがありました。「この時点で、力を振り絞って誠実に書くことに意義がある」と思って必死に書きました。それは、おそらく未来の自分へ宛てた手紙のようなものです。その時の自分の感性を思い出すために。過去と未来とが共同して働くための仕かけとして。

■（2011年3月31日の文章）

自分は、東京に住み、32歳で、医療の職についている。自分は活動家でもなく、思想家でもなく、人格者でもない。あの日以来、被災地からの情報におびえ、混乱し、戸惑い、うろたえて日々を過ごしているひとりの人間でしかない。

ただ、プロの医療者としての倫理観は保っている。いつも以上に心を平静に保ち続けることを自分には課して、辛い時こそ患者さんには笑顔で接したいと思っている。そうは言うものの、仕事の合間合間に被災地のことを思うと、またそのことで頭がいっぱいになる。深い海の底のようなかなしみを感じる。

そして、自分が東京という安全地帯にいることの罪の意識のようなものさえ感じる。自分は果たして何をしているのだろうか、と。

ただ、自分はこうして生きている。だから、こうして書いている。自分が生きているからこそ、病いに苦しむ人に寄り添うことができる。医療では、相手のいたみやかなしみに共感して「同じ」目線で見ながら、それでいて「違う」目線で見ているという節度も持たないといけない。主観と客観という矛盾する心理状態を、矛盾のまま抱えながら前を向いて歩くことで、医療行為は成り立っている。

今回のことは、ただただ、かなしかった。個人的にかなしんで、かなしんで、かなしみ抜いた。かなしみのあとで感じたことは、「人間が生きていることはなんとすごいことだ」という当たり前のことだ。

これは日々の医療の行為でも感じていたはずなのに、忙しいことを言い訳にして正面から向き合わなかったために、深い場所で眠らせていたことだ。自分は希望と絶望の間で揺れ動くひとりの臆病な人間でしかないけれど、自分がこうして生きているからこそ、恐怖におびえ、怒り、絶望できる。そして、怒りの矛先が偏見や決め付けではなかったかと反省し、わかりやすい善悪の物語に自分が改変してなかったかと反省し、また心を落ち着けて元の生活や仕事へと戻ることができる。光と影が同時に見えだすと、絶望が反転して希望さえも感じることができる。人間が生きているからこそ、お互いを批判し合い、高めあい、低めあい、尊敬しあい、責任をなすりつけあい、協力しあうことができる。

自分は医療の職についていて、お互いが生きていることを確かめあうような仕事をしている。

もちろん、死は敗北なんかではなくて、生と死は表と裏で光の当て方に過ぎないと言えるかもしれないけれど、そんな文学的な比喩を軽々しく言うことが許されているのも、自分が、いま生きているからだ。そして、これを読めるのも、いま生きているからだ。

いま生きているということを改めてしっかり考えていきたい。いま生きているひとたちと共に、生きている未来を考えたい。

職業柄、特に健康のことが気にかかるけれど、自然のこと、エネルギーのこと、生活のこと、水や食事のこと、環境のこと…あらゆる現在やあらゆる未来のこと。

今回の出来事に対して考えるべきことは、言葉と同じ数だけ見出されるかもしれない。それぞれに長い時間がかかる。体力が必要だ。

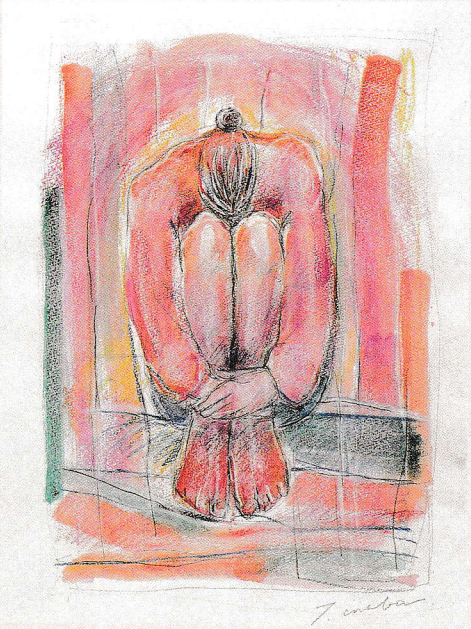
自分がいま生きているのだから、サイズやスケールにこだわらず、自分が考えたことに対しても卑屈にならず、生きている限り考えていきたい。何らかの関係性を保ち続けたい。

お互いが生きていることを確認し合う医療の仕事をしている人間として、より強くより深く、いま考えていることです。

生きている、ということは、生き残っている、ということです。うろたえたり、おびえたり、不安に思ったり。それはすべて生きていることが前提で、今生きているからこそ感じられることです。生きていることは、すでに前向きなことです。その思いがあるからこそ、矛盾を抱えながらも前へ歩けます。いくら絶望と希望がまだら模様に混在していようとも、すべて合わせると、生きていること自体はきっと希望の方向へと向いています。

皆さんは、3月11日に何を思いましたか？　その時の自分と今の自分とは、ちゃんとつながっていますか？

自分はあの時に受け取った「いのち」を含めたいろいろなものを、未来へとつなげたいと、今でも強く思っています。人生の節々で原点を思い返す意味は、自分自身からブレないためにあるのだと思います。



Profile

稲葉俊郎

いなばとしろう。医師。東京大学医学部付属病院循環器内科助教。東京大学医学部山岳部の監督、涸沢診療所の所長（夏季限定山岳診療所）も兼任。さまざまな伝統医療、補完代替医療、民間医療への造形も深い